

---

# The fruit of their LOVE

銀水晶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The fruit of their LOVE

### 【著者名】

N2744E

### 【作者名】

銀水晶

### 【あらすじ】

彼女にフラれた俺に高校の時に仲の良かつた女の子が…

「「」みんなさーい ． ． ．」

冬の寒い夜。雪の降る中、俺、葛城武は誰の田から見ても完璧と言えるほど見事にフリれた。本気で好きになつて告白し、付き合い始めて3ヶ月 ． ． ．あまりにも突然の別れだった。

事の発端は昨日 ． ． ．

高校時代に仲の良かつた女の子と久しぶりに会い、食事をした所から始まる。

「じばらり見なかつたけど有希だつてすぐわかつたよ。」

「私も武くんだつてすぐわかつた。」

駅の近くの喫茶店に入り2年ぶりの再会に少し驚いた俺。彼女は、有希は昔と何も変わらずに窓側の席に一人で座つていた。

「有希？斎藤有希さんだよね？」

「武くん？」

「やつぱりーー！」

有希じょんーすげえ久しぶりだなーー！」

「それさーいの台詞だよ、高校卒業したら連絡取れなくなつちやうし。」

「いやあ、携帯壊しちゃってメモリーが無くなっちゃって。」  
2年ぶりの再会だったという事もあり2人は昔の話で盛り上がり始めた。

カラソカラソ

「武……」

「美姫……」

俺が彼女の名前を言い終わるとほぼ同時に彼女が凄い勢いで喫茶店を出ていった。

有希を残して後を追つたが追いつく事は出来なかつた。

「美姫……」

その日は彼女と連絡さえ取れなかつた。

そして今に至る。

「いつこの時の携帯の音楽はなぜか無性に腹が立つ。

「もしもし……」

「武くん? 昨日は」「めんね、なんか私のせいで彼女さんに変な誤解をさせちゃつて……」

「有希か、いいんだ。たつた今フЛАれた所だから。」

「フЛАれたの？！」

本当に「ごめんなさい。」いぐら謝つても許してもらえないだろ？ナビ、本当に「ごめんなさい。」

「大丈夫だよ、こんな事で落ち込むほど弱くないから。それより今から会えないか？」

今は誰でもいいから知り合いの顔が見たかった。

「…「うん、じゃあ昨日の喫茶店にいるから…。」

「わかった。」

カラソカラソ

「「ごめん、急に会いたいなんて」

「「うん、私も直接会つて謝りたかったから。本当に「ごめんなさい。」

「いいつて、そんなに謝られると俺が悪い事したみたいだから。」

「でも…」

「それよりどうか行かないか？  
久し振りに会つたんだから。」

とつあえず街を歩く2人

この店、美姫が欲しい服があるって言つてたな  
こつちのゲーセンは美姫が欲しいって言つて3000円も使って  
イグルミ取つたつ...

忘れる為に有希と街を歩いてるのに次から次へと美姫との思い出が  
甦る。

「...くん!武くん!..」

「あつ、『めん。  
少しボーッとしちゃつて...』

「どうしたの?大丈夫?」

「ちょっと美姫との思い出が...」

涙ぐむ俺

「...『めんなさい。』

「だから、そんなに何回も謝るなつて。別に有希は悪くないよ。」

「そんな事言つても...」

「あつ!カラオケ行!う?..

今無性に歌いたいんだよね。」

高校時代、軽音部でヴォーカルをしていた俺はそれなりに歌に自信  
があった。

「武くんが行きたいならいいけど……」

近くのカラオケ店に入り速攻で入れたのはラブソングだった。  
歌いながら泣いてるのに気付いた……

「武くん、泣いてる……」

有希の少しかすれた声が聞こえた。

「別に……」

歌の途中で演奏停止を押した。

「本気で好きだつたんだね、彼女の事……」

「ああ、多分誰よりも美姫を愛してた。」

「私じゃ代わりになれない?」

「えつ?」

「私、高校の時から武くんの事大好きだつたんだよーー!  
昨日会えた時本当に嬉しかった。」

「有希……」

彼女の目から涙がこぼれ落ちた。

「今の武くんにこんな事言つのもひどいけど、私じゃ代わりになれ

ない？

私でいいんならなんでもするからーー。」

高校時代、一度も泣いた事のない有希。卒業式だって泣かなかつた。

そんな彼女が今、俺の目の前で泣いてい、こんな俺を好きだと黙ってくれている。

でも…

「「めん、今はまだ誰とも付き合ひはなれない…俺も有希の事は好きだけど、まだ…」

「「めんね…」

私、凄い自分勝手だつた。  
武くんの哀しみも知らないで…」

「いや、でも嬉しいよ、そう言つてもいいえて…」

「こんな人の痛みもわかんないような私だけどまた遊んでもりえる？」

「ああ、連絡するよ。」

まだ時間はあつたがカラオケを出る2人。  
帰り道はお互い何も話せなかつた。

「じゃあ私もつちだから…」

「送つてくよ。」

「ううん、1人で帰れるから。

また連絡して。」

「そり…、じゃあまた今度…」

「ばいばい」

有希の言つたばいばいの一言がなにか悲しげだった。

田畠

「大好きだつたんだよ…」

昨日の有希の言葉が頭の中に残つてゐる。  
有希の気持ちには高校の時に少し気付いていた。ただ高校時代の俺  
は少し恥ずかしくて気付かないふりをしていた。

「有希…」

俺は電話をかけた。

「もしもし?」

「有希?」の前の喫茶店にいるから…」

相手の用事があるのかも聞かないで電話を切り喫茶店に急いだ。

「武くん。」

有希は俺が着いてから30分くらいしてから店に来た。

「「めん、急に呼び出して。

どうしても有希に言いたい事があるんだ。

「

「なに？ 私に言いたい事？」

「行こ。」

有希の手を引いて喫茶店を出る俺

「何？ 急にどうしたの？」

驚いた顔をする有希

俺は何も言わずに有希を引っ張る。  
着いたのは人気のない小さな公園。

「有希、聞いて。

俺は有希の事が好きだ。でも今付き合つたら有希と美姫をかぶらせ  
るかもしない、それでも俺を好きだって言つてくれるか？」

昨日の夜、ずっと考えてまとめた答えた。

俺は美姫を愛してた、でも、有希に会つた時、一瞬だけ美姫の事  
を忘れてしまつた。

そんな自分が許せない。でもフランched後に一番に連絡をしてきて慰  
めてくれた。

こんな俺を好きだつて言つてくれた。

そんな有希を傷つける事が今は許せないと思った。

「有希？」

下を向いたまま固まっている有希

「私が美姫さんの代わりでもいい、それで武くんが救われるなら。  
でも、そのうちでいいから、いつでもいいから私を私として見てく  
れる？」

「ああ、約束する」

「いつまでも待ってるから。」

「有...」

誰もいない公園で唇を重ねる。

今は美姫の、元カノの事は考えない。

有希の事だけを考える。

この先、どんな未来が来ても有希を守り抜く。

有希と会った日と同じ雪が降る寒い夜の事だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2744e/>

The fruit of their LOVE

2011年1月28日10時39分発行